

安全・安心—地域と子どもの環境—（保育ドキュメンテーションを用いて）

研究代表者	坂崎 隆浩	（こども園ひがしどおり園園長）
共同研究者	北野 幸子	（神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授）
	梶沢 幸苗	（中居林保育園園長）
	東口 房正	（ふじが丘保育園園長）
	田和 由里子	（春日保育所所長）
	筒井 桂香	（もとしる保育園副園長）
	永田 久史	（第二聖心保育園園長）
	田中 啓昭	（もくれん保育園園長）
	高月 美穂	（藤原保育園主任保育士）

研究の概要

日本における幼稚園・保育所における乳幼児教育の基本は環境を通した保育であり、小学校の接続が重要視されている。幼児期にふさわしい教育的な学びは、一人ひとりの発達を見通した保育であり、遊びを通した保育のねらいの達成となる。このねらいは保育所保育指針、幼稚園教育要領に共通したものである。

保育所はその特性上、現在は「保育に欠ける子」を長時間施設保育する。よって保育現場では保護者への保育伝達は送迎時、園便り等のおたより配布等が頻繁に行われてきた。しかし、そこでは保育の様子や諸連絡が中心に行われてきた。そのため、安全・安心に至る保育の効果を十分に説明できず、また、子どもの発達の様子やどんな目的を持った保育なのか、どんな保育方法を用いたのか、そしてその保育によって子どもの育ちや保育の成果はいかなるものであったかを十分に伝えることができなかったように思われる。本来であればこれらが伝わってこそ、保育の安心感があるものである。本研究では安全・安心を有効に伝えるものとしての保育ドキュメンテーションの必要性が示唆された。ドキュメンテーションの効果は、子どもの観察や記録という子どもを見つめること（事実記録）と保護者や広くは地域に子どもの様子や保育のあり方を知ってもらう（教育的意図と成果、評価の発信）という二つの点が挙げられる。今回示した日本式保育ドキュメンテーションも含めてその方法は多岐に渡る。それは突き詰めていけば、たった一人の子どもの発した言葉ひとつでもドキュメンテーションになりうる。そこから発せられた言葉からも保育を充実させるべきヒントがある。よってドキュメンテーションが保育の説明責任、園保育活動のPRとしては有効な材料であるのでその発信促進の必要性を提言したい。本研究では、日本におけるドキュメンテーションの導入、日本式保育ドキュメンテーションの開発と活用のための提言、実験における検証、浸透性等について論じ提言した。イタリアにおいて幾ら素晴らしいドキュメンテーションであっても日本においての必要性やその方法の確立が必要であるからである。前述したが、現在行われている事実記録という状態から、教育的意図と成果、評価の発信へと導くことが、これからの保育の発展に寄与する大きな一歩であると考え。更に保育の安全・安心及び地域のこども環境の充実を考えたときにこの保育ドキュメンテーションによる期待される成果は大きいと考える。日本式保育ドキュメンテーションの浸透により安心・安全の保育が進展していくことを大きく期待したい。

キーワード：保育の説明責任、プロジェクト型保育、日本式ドキュメンテーション、保育士の自己成長の糧、家庭との連携および地域への情報発信

はじめに

子ども環境の質を考えると、OECD（2013）¹⁾等、世界では幼児教育・保育の質を複数の視点からモニタリングしている。それには、子ども個人／職員／施設サービス／カリキュラム等が含まれる。しかし、日本の場合は

施設安全基準のみがとにかく安心の担保であり、安全・安心の保育に子どもの発達保障や職員養成などは基準に成っていない。つまり、保育を養護と教育の総体と考えるならば、養護的な安全・安心が主でありつつも、教育的な観点も必要であり、その点が不足している。世界が示しているように、最低限安心・安全を保障するものであ

る点は当然であるが、これ以外の観点も同時に保障されてこそ、子ども環境ひいては地域の保育環境も保たれるのである。

安心・安全の原点は保育がきちんと行われているのか、又それが保護者や地域に説明責任として行われているのかによって担保される。保育現実の可視化、保護者への発信は安心安全な保育の原点である。それに伴う実践の質の向上は、つまりは保育の質の向上であり、保育の科学化に繋がっていくことになる。

その一つの手法として本研究では、保育ドキュメンテーションに注目する。本研究ではまず発祥地であるイタリアのレッジョ・エミリア市における保育ドキュメンテーションとは何かを紹介しその特徴や必要性を確認し、次に日本式保育ドキュメンテーションの開発と活用のための（個別の園を超えた）調査を行う。特に保護者のリアクションを明らかにし、日本式保育ドキュメンテーションの開発とその活用について、意義、課題、その浸透のための方略を提言する。

1. 保育ドキュメンテーションとは何か

1-1. レッジョ・エミリアの保育におけるドキュメンテーション

イタリア北部レッジョ・エミリア市の保育は、教育家ローリス・マラグッツィの指導と市当局の理解と支援によりその基礎が築かれた。その実践は1991年に米国のニューズ・ウィーク誌に「最も革新的な幼児教育」と紹介され世界中に広く知られることとなった。我が国では2000年以降、概説書やビデオ等によって紹介された²⁾。『子どもたちの100の言葉』というテーマで作品展が世界各国で開催され、その実践は高く評価されている。

レッジョ・エミリア幼児学校は、1クラス20名程度に対して2人の保育者が配属され、1人は主に幼児の活動支援担当、1人は主に記録を担当する。各幼児学校に1人のアトリエリスタ（芸術保育者）が配属される。またペダゴジスタ（教育保育者）がカリキュラムの立案等教務主任のような役割を果たしており、保育の体制が充実している。

レッジョ・エミリアの保育の特徴としては、創造性を重視していることが挙げられる。創造性の教育は、それを支える保育専門家が充実していることと、ドキュメンテーションが多いに活用されることにより、豊かなものとなっているといえる。

この保育方法はプロジェクト型保育であり、「レッジョ・エミリア・アプローチ」といわれ、子どもと大人の相互作用に基づく創造性の教育が重視されている。プロジェクト活動のテーマは子どもたちや保育者たちの経験や日々の出来事、問題などに関する子どもたちの話し合いにより決められ、相互作用を重視したグループの共同活動が展開する。これを支えるのがペダゴジスタ（教育

保育者）とアトリエリスタ（芸術保育者）であり、またドキュメンテーションが大いに活用されている。

ドキュメンテーションとは、完成した作品の結果ではなく、保育のプロセスを可視化するための記録である。プロジェクト型保育においては、子どもたちの個々の会話や行動を様々な方法（録音、写真、ビデオなど）により活動記録や観察記録が作成され、保育を可視化し、保護者に保育の意図、活動の実際、子どもの育ちへの評価や課題があらわされる。ドキュメンテーションによって、子ども一人ひとりの学び、成長していく過程がその子ども自身や親などによって確かめられるようになっていく。

1-2. 日本におけるドキュメンテーションの導入

レッジョ・エミリアの影響もあり、日本においてもドキュメンテーションの導入が個々の園レベルでなされている。そもそも、保育園から保護者に向けて「おたより」・「育児日誌」・「HP」・「ブログ」・「ボードフォリオ」・「保育ドキュメンテーション」等多様な方法で保育内容等の情報発信や情報公開がなされてきた。

その背景の一つに社会の変化、特に医療業界からの影響があげられる。三次医療法の改正（H9年）において説明責任（インフォームド・コンセント）の導入から患者への医療情報の説明と同意に変更になり、家族への説明責任（インフォームド・コンセント）が徹底され可視化できる医療地域連携が必須となった。保育所も同じくしてH10年に入所方式が措置（行政処分）から選択する方式に改められ保育所も説明責任（アカウントビリティ）の必要性が出てきた。H20年に、保育所保育指針の改定が行われその中で保育所が行う保育内容を適切に説明するよう努めなければならないと記述され現在に至っている。

一方、その背景として、少子高齢化による社会の変化の影響も挙げられる。孤立した子育ての環境の中、不安や悩みを抱える保護者が増加した。人とのかかわりが希薄になり、生活リズムの乱れや食生活の問題等が起こっている。多忙で多様な価値観をもつ保護者が増えてきている。今日、生涯にわたる人格形成の基礎を培う極めて重要な乳幼児期に、説明責任を通し保育園と保護者がパートナーとなり共通理解を図りながら保育をしていく必要性が高まっている。加えて、保育所保育とは専門家による専門的活動であり、その説明責任の必要性も高まっている。

しかし残念なことに、多様な発信をしているにも関わらず保護者にとって保育園はブラックボックスであることが多く、保育所の乳幼児の保育の大切さやどの園も大切にしている理念や保育方針が理解されてなく、保育者の適正な評価を受けているとは言い難い面もあるように思われる。よって、単に活動の事実を伝えるだけではなく、その子の変化（成長や学び）を具体的に伝えていく

ことが大切であるといえよう。

保護者へ保育の現実を効果的に伝える方法として、保育ドキュメンテーションがある。保育ドキュメンテーションとは、写真を使って、文章や言葉では上手く伝わらない学びと育ちの物語を「見える化」していく。保育のねらいやその経過、子どもに対しての気づき、保育者のこれからの関わりや見通しを表示し構成する。見やすい画面構成と視覚に訴える写真は、保護者の興味を引き保育に対して具体的な会話を展開して楽しむこともできる。また、保護者と子どもが一緒に見ることで写真からの記憶を引出し、保育の追体験と合わせて学びの再確認もできる。さらに、ファイリングする事で新人研修や園内研修の教材として利用することで結果として保育の質の向上に繋げることができる。レッジョ・エミリアの影響を受けつつ、日本においても各園が保育ドキュメンテーションを導入しつつある。

1—3. 日本式保育ドキュメンテーション開発

日本の保育の特徴は、その集団性にあるとも言えるであろう。人間関係が重視され、特に年長児には、協同的な学びの育ちが期待されているといえよう。集団保育においての安全安心を考えたとき、一つには身体的危害と精神的危害の危険を回避するという安心安全の確保があり、このことに関しては厳しい評価基準やチェックリストを活用し保育者は様々な方法で常に十分な配慮を心がけている。言うまでもないがこの適切な養護的環境が確保されない限り保育所保育の集団が持つ豊かな学びの機会を十分に子どもに提供することはできない。これらが基本的に確保されたことを前提とし、もう一つの安全安心が存在することに目を向けてみたい。それは子どもの学びが集団保育の中において、必要に応じて豊かに提供されているかという教育の安心安全の確保である。

例えば保護者側からの視点で考えたとき、行事での子どもの姿を見ることはできるが通常の保育がどのように行われ、何を目的にわが子が保育をされているのか、また年齢に応じた保育が適切に提供されているのか、保育からどのような影響を受けどのような学びと成長があるのか、保育指針に沿った保育とはどのようなものであるのか、本来の幼児の学びとは何なのかが見えないことへの不安を持つのではないだろうか。

子どもの育ちには保育者と保護者との共通理解と協同的関わりが必要であり、よく言われる「共育、協育、教育」が求められ、養護と教育が一体的に行われる保育現場には養護的安心安全と合わせて教育的安心安全も求められていることを理解しておくべきである。

この教育的安心安全を確保するための一つの方法として日本型ドキュメンテーションが多いに期待される。

現在、園便り、クラス便り、個人のお便り帳、写真提示、ビデオ等情報発信に工夫をしてきているところだが、ほとんどが「～をした」という結果報告に終わっている

ことが多く、結果に至るまでの過程や、その活動を選択した理由のところには至っていない。

今回提案している保育ドキュメンテーションは、読みやすい文章と写真で構成したもので、保育の専門家として伝えるべきものが系統立てて見えるように作成することができる。

まず子どもの発達が明確に見え、発達に沿ったプロジェクト（保育内容）が立案されていることが分かり、プロジェクトに関わった子どもたちが、そこから何を学び、どのような力をつけているかが簡潔な文章で示されることにより、保育指針に則った日々の保育が見えてくる。またこの方法は情報発信として有効であるだけでなく、作成する保育者側にとっても、自らの保育の評価と専門家としての知識習得につながり、保育の質の向上に大いに役立つものである。

つまり、「日本型保育のドキュメンテーション」の役割は、保育士が発達の科学的根拠に基づいた情報発信をするための自己研鑽の機会になること、保護者が子どもの発達を正しく理解する手助けとなること、そして地域社会に子どもの育ちを発信することで、三者が協力して子どもを育てていく構造が出来上がることがあげられる。

2. 日本式保育ドキュメンテーションの開発と活用のための調査研究

2—1. 調査の目的

レッジョ・エミリア市の保育の影響を受けてか、保育ドキュメンテーションを導入している園もみられるようになってきた。各種工夫により保育の可視化を図っている実態もある。しかし、それはそれぞれの園が各園で実施工夫をしているものであり、園を超えて、つまり複数の園で保育ドキュメンテーションを導入し、その効果を検証した研究は他にみられない。

本研究では、梶沢幸苗氏を会長に置く保育総合研究会の会員全国100施設の中から、本年ドキュメンテーションを研究している24園を対象にして、共通の題材（保育のねらい）のドキュメンテーションを行い保護者に配布し、その結果を保護者及び保育者に対してアンケートをとった。その方法と考察については後述する。

現在、保育総合研究会で進めている（レッジョ・エミリアの活動記録や観察記録による保育の可視化、保護者に保育の意図、活動の実際、子どもの育ちへの評価や課題を発信する）手法を使って発信、情報の伝達状況や受け取り方について状況把握からその有効性等について比較検討し、日本式のドキュメンテーションを模索する。

2—2. 方法

研究方法は以下のとおりである。

- ・調査日時（2013年8月）
- ・対象：園数24、保護者数605（回収447）、保育者131
- ・ドキュメンテーションの作成 色水遊び
- ・データ収集の方法：配付方法、収集方法、・質問項目の概要・倫理事項については別紙を参照。

事前に設定した共通の題材（保育のねらい）でドキュメンテーションを行った。今回の題材（保育のねらい）は「色の変化に興味をもちながら、色水遊びを楽しむ」とした。

同一の内容となるよう今回の題材（保育のねらい）をもとに活動内容・用意するもの・環境設定・望まれる子どもの姿・指導上の留意点を事前に計画し作成したフォームを各園に配布し設定保育を行った。

その活動を保育士は「保育ドキュメント」として同一フォームで保育の記録を作成し報告と振り返りを行い、指導者よりアドバイスとしてのフィードバックを加え、保育士のスキルアップへと繋げた。

保護者に対しては、「保育ドキュメンテーション」として同一のフォーム（画像を使い保育の意図、活動の実際、子どもの育ちへの評価や課題を記載）を使用し保護者全員に配布した。

その際、保護者・保育士にアンケートを行い現状の把握とした。

保護者に対しては、過去の配信物や掲示物との違いについて1点、園児の活動を知らせることについて内容の良さ・わかりやすさ・伝わり方・発信の頻度について4点の計5点出題しアンケートを行い、感想については自由記述が可能な欄も設けた。

保育士に対しては、配布したドキュメンテーションに対する保護者の反応、反響について保護者へ①口頭 ②連絡帳等 ③保育士より尋ねる という3種の確認状況を設定し、楽しさ・伝わり方・わかりやすさ・継続希望の有無についてアンケートを行った。感想については自由記述が可能な欄も設けた。

2—3. 結果と考察

2—3—1. 保護者アンケートの結果と考察

保護者よりのアンケートについてアンケート結果を自由記述を交え考察する。

保護者向けアンケートの1「今までのおたよりとの違い」では、「見やすく具体的で判りやすい」という感想が多く、（大きく違った・違った）と感じた保護者が80%を占めた。残りの20%においては、（あまり違わなかった・違わなかった）が16%となり、すでに画像を掲示する試みを実施されている施設が教育的効果を示しきれていなかった場合はこの評価となり、教育的効果の提示が不可欠であることを示している。残りの4%（わからない）はアンケートの回答から画像を添付せずに掲示していたと考えられる。

保護者の自由記述を考察してみると、「綺麗」「見やすい」「カラー印刷」との単語が必須で書き込まれており、見てみたい、という意識が伺える。画像を取り入れることで全体をイメージできるという部分に評価が高い。これまでも画像などを使った情報発信を行っていた保育園が多かれ少なかれあったにも関わらずこの評価であったことは非常に興味深く、発信するだけではなく内容が重要であることを示している。また、「表情が見える」、「学んでいることがわかる」、「遊んでいる姿が見える」ことが保護者の安心感に繋がっているということも伺える。

保護者向けアンケート「このような形で園児の活動を知らせることについての感想」の2（1）では、（とても良い・良い）が97%をしめており、残りの2.8%は（ふつう）との回答であり、（良くない）が0.2%となり、（まったく良くない）は皆無で好評価を示している。

保護者向けアンケート「このような形で園児の活動を知らせることについての感想」の2（2）では、（大変わかりやすい・わかりやすい）が94%をしめ、残りの6.3%は（ふつう）との回答であり、（わかりにくい）が0.7%となり、（大変わかりにくい）は皆無で好評価を示している。

保護者向けアンケート「このような形で園児の活動を知らせることについての感想」の2（3）では、（よく伝わる・伝わる）が94%をしめ、残りの6%は（ふつう）との回答であり、（伝わらない）が0.2%となり、（まったく伝わらない）は皆無で好評価を示している。

先のアンケート1での「見やすく具体的で判りやすい」との保護者よりの記述が裏付けられるものとなっている。「保育園での活動は楽しみで興味があるが見えない部分も多く、このような試みは嬉しく記念に残したい」、「普段は見られない部分が見える」、「楽しそうに活動している」、「子どもと1日の活動を話し合い共有できた」との記述がある。これはお迎えの時の口頭での報告、連絡帳などの文字での報告では伝わりきれていない部分があり、画像を効果的に使用することでその部分が解消され圧倒的に判りやすくなったことを示している。今までも保育園での連絡帳は残していますという保護者はいたが、画像がある方がより記念として残したくなるようである。しかしながら、見やすく作る目的は記念に残してもらうことが目的ではなく、読もうと思える動機付けであり教育的効果が届かなければ保育ドキュメンテーションとはいえない。

教育的効果が届いた保護者の認識を伺えるポイントとして、「遊びの目的など、よく分かり楽しく拝見しました」、「あそび（活動）の狙いが明記されていることで、その活動の意味を親が知ることができた」との記述があり、ねらいと目的および教育的効果について伝わっていることが示されている。しかし、同時に保育園ではどうしても「あそび」、「活動」、「生活」という捉え方をされてしまうことも示している。これに対して、「みんなで

こんなことを勉強したり遊んだりしているんだなと見ると安心します」と、「学び」と「遊び」をそれぞれに行っていることを捉える記述があり、見やすくわかりやすい画像によりそれぞれの内容が明確に伝わっていることが伺える。保育全体の可視化に努めることが前提だが、日々の保育においての「学び」の部分について特化して表現することで、保育園の持つ教育部分への認識が高まる可能性を示唆していると考ええる。また、「子どもと一緒に見ながら、一連の動きを再現してくれたり、見立てで教えてくれ普段より様子が知れた。」との記述があり、興味の湧くアイテムを使えば保護者自身も子どもとの日々の触れ合いに繋げやすいことを示している。

確認が必要な部分としては、「子ども本人は自分が写っていないと残念そうな顔をしていた。」という記述があり、ドキュメンテーションを配布する目的が伝わっていないと考えられ、保護者への周知の必要があると考ええる。

園によっておたよりとして配布、園内の掲示と2種類の手法となったため、掲示についての記述を記載する。「掲示ではゆっくり見れないので家庭ごとに配布してもらえるとゆっくり見れる。」「掲示を楽しみにしているが、大きいサイズ（B4、A3）で作成してもらえると見やすい」

最後に発信の頻度についての回答として、

保護者向けアンケート「このような形で園児の活動を知らせることについての感想」の2（4）では、（毎日見たい）が11.4%、（毎週見たい）が28.4%、（毎月見たい）が50.3%、（2、3ヵ月に1度見たい）が9.2%、（別に見たくない）が0.7%との結果となった。

この点に対して、「おたよりは良いと思うが、作成される先生方の負担が増え、大変だと思う」、「先生方は面倒で大変でしょう」という保育士への負担増を心配したり、「全家庭に1枚ずつカラー印刷はもったいない」、「印刷代（インクカートリッジ代）がかかりそう」と費用負担に付いても心配している記述がいくつか見受けられた。

保育士の負担が増えて大変だと捉えられている点に付いては、保護者の日々の保育士業務への理解が薄いように思われる。これ以上仕事を増やしては大変というニュアンスだけでは無く、ある一面からは子どもだけ見てくれて日々の連絡だけくれれば良いというニュアンスにも受け取れた。

本来保育ドキュメンテーションは、年間よりデイベースにまで落とし込むそれぞれの計画を作成する際にすでに存在するものであり、改めて作り出すものではないという観点から、年間のカリキュラムより月ベース、週ベース、さらにデイベースで保育計画が立てられており、それに則って準備や段取りが行われ日々の保育が成り立っているものであり、このためだけに華飾されたものではなく保育園として保育士が日々確実にに行っている業務の

理解を深めていただくために情報を発信するものであるということの周知に欠けたために招いた結果であるといえる。

その対案として、「現行のホームページで良いのでは」、「毎月1枚みられたら嬉しいです」、「このおたよりの発行は、時々でも十分ありがたい」との記述があった。保護者が保育士の仕事の増加に対して寛大な思いを持たれていると感じ、日々の関係性が伺える。しかし、連絡帳などについて大変だと捉える方はいないことを考えると、今回の「おたより」の作成については手が込んでいるという点が考慮されての意見であろう。また、費用面を心配される記述が複数あった。

保護者アンケートをまとめると、保育ドキュメンテーションの発信について、全般的に好印象で受け入れられ、わかりやすく有難いと受け止めてもらえている。

しかし、発信の手法や教育的効果のポイントの明示や説明においてばらつきがあるため、「なぜ配布しているのか」の認識が不足している。今後の研修等で根本的な目的の周知が必要である。また、保育ドキュメンテーション以外の可視化の実施状況により、受け取り方に違いがあることが示された。年間カリキュラムや月・週・日単位の計画がたてられ、計画にのっとり日々の保育が行われていること。その計画には各年齢においての発達や将来に向けての根底を積み重ねていくものを加味して作成されていることなどへの認識の濃淡が保育ドキュメンテーションを作成する目的を受け取る土壌の有無に繋がっている。

ドキュメンテーションを単なる記録として捉えられている状況から教育を受けていると捉えられている状況までの差異が見受けられる。そのようなことから、実際に行っている教育的部分については伝わるように発信手法のスキルアップが必要であると考ええる。

2-3-2. 保育士アンケートの結果と考察

保育士向けアンケート1「口頭でえられた反応・反響について」では、全回答において否定的な回答は皆無であった。しかし、伝わりやすさや報告に対しての保護者のリアクションに対する記述がほとんどで、どのような部分のどのような教育的部分が伝わったのかにまで確認がおよぶ記述はほとんど見られなかった。また、保護者よりの労いをアピールするものとなっている。

これは、ドキュメンテーション発信の目的における保育士自身が日々の活動を伝えることに着目しており、単純に業務が増えたが保護者が喜んでくれて良かったとの認識となっている。そのようなことから保育ドキュメンテーションによる保護者の教育的効果の認識向上が信頼関係に繋がり、日々の保育がやりやすくなるという本来の目的とは認識のズレがある。しかしながら、「活動で使うものを作る、実際に使って遊びを楽しむ…遊びの経過がわかったり、子どもの楽しんでいる様子が伝わって

嬉しかったと声をかけられる。」

「色水遊びから、たくさんのことを学ばせてくれているんだと嬉しくなりましたと感謝の声がけをもらいました。」など教育的効果が伝わったと思える記述が2点あった。

これら記述の内容からは、どれくらいの教育的効果が伝わっているのか不鮮明であるが、具体的にこのような成長に繋がったのだと感じる記述ではなく、今一步という感じが否めない。この辺りについては、現時点で臆げに感じてもらえば良いのか、明確に認識してもらった方が良いのか考察が必要であり、これから積み重ねていく第一歩としては光明に値する記述である。

保育士アンケートから、保育士の認識が保護者にダイレクトに伝わっていることが明らかになった。保育士の傾向として、大袈裟に発信しない奥ゆかしさがある。架空のことを華飾して伝えるのではなく、日々行っていることの本来の意味を伝えるための発信なのだという保育士の目的意識の改革が必要であろうと考える。

2—3—3. 総合考察

保護者の発信頻度への回答と保育士が求める回答は本来の目的とは違う観点でのものとなったが、現実問題として日々の情報発信を行う時間は保育士の現在の就労状況では困難であると言わざるをえない。やはりペダゴジスタとアトリエスタという役割をもつそれぞれの人材が不可欠である。

子育ての安心・安全を保持する為には、子どもたちの日々の教育・保育に関連する部分に保護者の理解度が大きく影響する。その理解力を向上させる手法として保育ドキュメンテーションが有効であることはアンケート結果からも明らかである。

保護者の理解力の向上は、社会で言われる「親教育」としても有効であり、過去の日本で行われていた身内による子育ての伝承がほぼ不可能となった現在では必要不可欠なものといえる。また、保育ドキュメントというアイテムを使用し、指導者とのやり取りを行うことで、保育士のスキルアップへと繋がる複数の効果が得られるものである。

保護者の子育ての理解力が安心感・安全感に繋がり、保育士の保護者対応での心理的な重荷を軽減させ、保護者の感情の起伏にも影響を与える。その結果、子どもたち自身への対応も緩やかなものとなり、健やかな育ちが確保できる環境が整うのである。

3. 日本式保育ドキュメンテーションの開発と活用のための提言

3—1. 日本式ドキュメンテーションの必要性（期待される成果）

前述の調査研究の結果と考察から、「伝える」部分に

についての効果が多く見て取れるが、「学び効果を織り込んだ保育計画」が未熟なことが見られる。また保護者からの反応の多くは、おたよりのバージョンアップ版としてしか取られていない感否めない。今回は発信を主眼に行ったことで、以前からの繋がりがなく、単発であったことからの結果であるので一概にはいえないが、学びの継続性・計画性があるからこそ効果を発揮するものと思われる。

保育に多くの学びが含まれている点が浸透していないことが日本の保育の実情であることから、教育的効果を目的とした保育計画を立てるという意識が保育士に欠けており、さらに言えば園長主任に至ってもその意識とスキルが備わっていないことも現状である。

現在の日本の保育現場ではさまざまな記録として、保育日誌を始め家庭への連絡帳などがあり、保護者との情報の共有や保育の振り返り、育ちの記録などの役目を果たしている。ただし限られた時間の中で記録されたこれらは、「子どもの様子」を伝えるだけに終始したり、行なったことの描写にとどまったりすることが多い。実際の日々の保育で、具体的にどのように活用することができのだろうか。また保護者との情報共有において、より伝わりやすい手法が必要ではないだろうか。

現在の記録方式での最大のマイナスポイントは、結果だけ伝えて、アプローチから過程、最終結果へ至る教育的効果を伝えられない点にある。

そこに「日本式保育ドキュメンテーション」の必要性があると思う。

3—2. 日本式ドキュメンテーションの特徴（レッジョ・エミリアとの比較も含める）

レッジョ・アプローチといわれるドキュメンテーションは、保育における子どもの育ちへの教育的アプローチとして、各国の注目を集めている。

子どもの学びのプロセスを保育者・子ども・保護者と共有することを目的に、可視化されたドキュメンテーションという手法で、多様な視点でとらえることから、子どものさらなる可能性を引き出す保育プログラムへと進めていくことが、保育ドキュメンテーションを行なう取り組みである。

レッジョの保育者に学ぶとすれば、子どもを深く観察することで、今後展開するであろう子どもの活動を、多数の方向性を予測し、それに必要な素材や環境を準備しながら、カリキュラムを考える。そのカリキュラムを作成するにあたって、ドキュメンテーションが継続的に利用されることにある。それをアレンジすることで、日本式特徴である集団保育に適したカリキュラムとドキュメンテーションができるのではないかと。

保育者にとってドキュメンテーションは、保育の中の教育的アプローチを確認する意義、次回のカリキュラムへの土台となるとともに、順序立てた長期計画へとつな

げることができる。子どもの育ちを教育的効果として認識するとともに、子どもの発展の可能性を予測したり、保育者の取り組みを検討したりするものになる。

子どもにとってドキュメンテーションは、活動を振り返り、発見や知識、知恵のきっかけを得、ドキュメンテーションによって自分の考えに対して、保育者が関心を持ってくれていることを認識することになる。

保護者にとってドキュメンテーションは、園における我が子がどのように教育的効果を得て活動しているのかの様子、活動している意味を知ることができる。加えて保護者にとって保育における教育的取り組みに関する情報は、子育てへの責任感を促し、園の活動に理解を示しさらに協力的になる。ドキュメンテーションを通して、保育において教育的に育つ我が子を可視化することになる。

日本式ドキュメンテーションにおいては、特徴である集団保育における教育的効果を可視化し、情報発信することによって、保育者・子ども・保護者との情報共有ができ、託児施設との差別化を図ることができる意義は大きい。

3—3. 日本式ドキュメンテーションの活用を浸透させるために

近年保育ニーズが多様化し、日本の幼児教育を見ると保育園に対する評価は高いものがあり、より良い質の高い保育を求められている。しかしこれからの保育に求められるものは集団の中での子どもの育ちでばかりではなく、子ども一人ひとりの育ちに焦点がいくのである。このような子ども達に対し保育士がどのような保育内容がふさわしいのか立案し、その中でも子どもの育ちがよりよくわかる時間帯を考え、観察し行動内容を記録しながら保育ドキュメンテーションを作成し、家庭に発信していくことが保護者支援へとつながっていくと考える。近年の家庭では核家族化や共働きが進み、子どもの成長を見たいがなかなか時間が取れず、知らず知らずのうちに我が子が成長しているという家庭も少なくはない。そのことを考えると保育所から家庭への発信方法を考え、園生活の中で子ども達がどのように生活をし、学び、成長しているのかを家庭に伝えていかなければいけないと思う。子どもの成長や発達を考え保育をしていくことは保育士にとっては責務となる。個々の子どもの成長を把握し、どのように子ども達を養護と教育が一体となった保育の下で育てていくのか、連続性を考えて成長させていくにはどのような手順や手段をとっていけばいいのかを考えなければいけない。ドキュメンテーションを作る上で保育士としての視点を忘れず子どもの発想や子ども同士の会話、どのように遊びが展開されていくのかの過程を記録し、また記憶しドキュメンテーションとして保護者に発信することが重要であり、子ども達の未知な世界を共有し協働していく事こそがより良い子ども

の育ちにつながっていくのだと感じ、また家庭だけではなく保育士も次の豊かな保育につなげていくのだと感じる。

園での子どもの様子を保育ドキュメンテーションでまとめ家庭に発信していくことは、保護者にとっても子どもにとっても一つのコミュニケーションの話題作りとなるだろう。園でどのような生活をしているのか不安に思っている保護者にとって、少しでもわが子とのつながりが欲しいと考える。その時、ドキュメンテーションを仲立ちとして会話をすることでコミュニケーション能力も向上し、子どもとの絆も深まっていく。子ども達は自分が経験したことを身近な大人に共感してもらえた喜び、また保護者はわが子がどのように園生活を送り成長しているのか、また今興味を持っているものは何か、またどのような思いで日々を過ごしているのかを理解出来、親子共々、共通理解が出来ることの喜びを感じることが出来るだろう。また保育士にとってもドキュメンテーションに取り組むことで、子どもが今何に気づいているのか、何に目を向けているのかを知り、これからの保育をどのように展開し子どもの育ちを支えていかなければいけないのかを認識し、これから先どのように成長してもらいたいのかなど未来を見通して考えることの必要性を再認識するだろう。子どもの発想は計り知れず、一つの遊びに対し何十通りもの遊びの展開を考え、試し、行動し、思考し、また新しい知識を獲得していく。この未知な想像力を十分に発揮できるような環境を整え、様々な遊びを楽しむことと探究心や興味関心、知性が十分に発揮できず埋もれたままにならないようにしていく必要がある。

自分が様々な方向から見た子どもの姿や、聞いた子どもの思いを次の保育に生かし保育を育てることの出来る、また集団の中でも個々のことを考えることの出来る保育士になってもらいたい。そのためには上手にドキュメンテーションと向き合い、付き合っていくて欲しいと思う。

おわりに

日本における幼稚園・保育所における乳幼児教育の基本は明白である。幼児教育の焦点は環境を通した保育であり、小学校の接続が重要視されている。幼児期にふさわしい教育的な学びは、一人ひとりの発達を見通した保育であり、遊びを通した保育のねらいの達成となる。このねらいは保育所保育指針、幼稚園教育要領に共通したものである。

保育所はその特性上、現在は「保育に欠ける子」を長時間施設保育する。よって保育現場では保護者への保育伝達は送迎時、園便り等のおたより配布等が頻繁に行われてきた。しかし、そこでは保育の様子や諸連絡が中心に行われてきた。そのため、安全・安心に至る保育の効

果を十分に説明できず、また、子どもの発達の様子やどんな目的を持った保育なのか、どんな保育方法を用いたのか、そしてその保育によって子どもの育ちや保育の成果はいかなるものであったかを十分に伝えることができなかったように思われる。本来であればこれらが伝わってこそ、保育の安心感があるものである。

本研究では安全・安心を有効に伝えるものとしての保育ドキュメンテーションの必要性が示唆された。ドキュメンテーションの効果は、子どもの観察や記録という子どもを見つめること（事実記録）と保護者や広くは地域に子どもの様子や保育のあり方を知ってもらう（教育的意図と成果、評価の発信）という二つの点が挙げられる。

今回示した日本式保育ドキュメンテーションも含めてその方法は多岐に渡る。本研究では紹介できなかったが、壁新聞方式から単純な家庭用のおたより、インターネット上へ掲示方法もある。又その内容については、行事の紹介、日常の平素な取り組み、クラス全体のこと等もある。それは突き詰めていけば、たった一人の子どもの発した言葉ひとつでもドキュメンテーションになりうる。そこから発せられた言葉からも保育を充実させるべきヒントがある。

保育現場としては作成の時間の確保とともにその作成内容や様式、項目の検討、実践や配布の頻度や配布のタイミングで気をつける必要があろう。特に保育所という長時間保育において作成時間確保は保育の振り返りの時間であるので、そのことは大きな課題である。しかしながら本研究で示したドキュメンテーションが保育の説明責任、園保育活動のPRとしては有効な材料であるのでその発信促進の必要性を再度提言したい。

本研究では、日本におけるドキュメンテーションの導

入、日本式保育ドキュメンテーションの開発と活用のための提言、実験における検証、浸透性等について論じ提言した。イタリアにおいて幾ら素晴らしいドキュメンテーションであっても日本においての必要性やその方法の確立が必要であるからである。

前述したが、現在行われている事実記録という状態から、教育的意図と成果、評価の発信へと導くことが、これからの保育の発展に寄与する大きな一歩であると考ええる。更に保育の安全・安心及び地域のこども環境の充実を考えたときにこの保育ドキュメンテーションによる期待される成果は大きいと考える。日本式保育ドキュメンテーションの浸透により安心・安全の保育が進展していくことを大きく期待したい。

註

- 1) OECD（2012）Starting Strong III OECD
- 2) レッジョを我が国に広く紹介したメディアとしては例えば以下があげられる。
J. ヘンドリック編著、石垣恵美子、玉置哲淳監訳（2000）『レッジョ・エミリア保育実践入門：保育者はいま、何を求められているか』北大路書房
田辺敏子、辻昌宏、木下龍太郎訳（2001）『子どもたちの100の言葉：イタリア／レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録』学習研究社
C. エドワーズ、L. ガンディーニ、G. フォアマン編；佐藤学、森真理、塚田美紀訳（2001）『子どもたちの100の言葉：レッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房
佐藤学、秋田喜代美監修・構成（2001）『レッジョ・エミリア市の挑戦：子どもの輝く創造力を育てる』（ビデオ）小学館

謝辞

本研究にかかわり、アンケートにご協力くださった園児、保護者、保育園に深く感謝申し上げます。

別紙

研究方法は以下の通りである。

- ・ 調査日時 : 2013年8月
- ・ 対象 : 園数24、保護者数605（回収447）、保育者131
- ・ ドキュメンテーションの作成内容 : 「色水あそび」
- ・ データ収集の方法

配布方法 : 各園の手法により対象の全家庭へ配布

収集方法 : 保護者用・保育士用ともに提出者のみ回収

質問項目の概要 :

保護者向けアンケートでは、各園が以前より取り組んでいる画像を使用した保育の可視化の試みとの相違点や感想に付いて回答を求めた

保育士向けアンケートでは、アンケートでは取り込めない保護者の反応や反響を（口頭・連絡帳・保育士より尋ねて）と分けし回答を求めた

別添「保育ドキュメンテーションアンケート」参照

倫理事項 :

なお、本調査は学術的見地から公正に行い、結果が対象者に不利な問題をもたらさないよう、調査データの管理と結果の公表の仕方に責任を持つことや調査データは純粋に学術研究の目的でのみ収集しその範囲で公表し、学術的分析のため以外には使用しないものであることを調査者に明示し、理解を得て行った。

保護者用 アンケート

記載年月日	平成25年 月 日
-------	-----------

今回の保育園からの「おたより」についてお伺いします。

1. 今までの「おたより」との違いがあったと思われるものを選んで記入してください。

①大きく違った	②違った	③あまり変わなかった	④変わなかった	⑤わからない
1.回答欄				

2. このように園児の活動をお知らせすることについての感想をお聞かせください。以下の項目それぞれについてもあてはまるものを選んで記入してください。

2.回答欄				
1) ①とても良い	②良い	③ふつう	④良くない	⑤まったく良くない
2) ①大変わかりやすい	②わかりやすい	③ふつう	④わかりにくい	⑤大変わかりにくい
3) ①よく伝わる	②伝わる	③ふつう	④伝わらない	⑤まったく伝わらない
4) ①毎日見たい	②毎週見たい	③毎月見たい	④2,3か月に一度見たい	⑤別に見たくない

感想を以下に自由に記述してください

記載年月日	平成25年 月 日
-------	-----------

保育士用 アンケート

配布した保育ドキュメンテーションに対する保護者の反応・反響について伺います。項目ごとにもっとも当てはまるものを選んで記入してください

1.口頭でえられた反応・反響について				1.回答欄
1) ①大変楽しく見ていた	②楽しくみていた	③楽しくみていなかった	1)	
2) ①よく伝わった	②伝わった	③伝わらなかった	2)	
3) ①大変わかりやすい	②わかりやすい	③わかりにくい	3)	
4) ①是非続けてほしい	②続けてほしい	③続けてほしくない	4)	
2.連絡帳等で得られた反応・反響について				2.回答欄
1) ①大変楽しく見ていた	②楽しくみていた	③楽しくみていなかった	1)	
2) ①よく伝わった	②伝わった	③伝わらなかった	2)	
3) ①大変わかりやすい	②わかりやすい	③わかりにくい	3)	
4) ①是非続けてほしい	②続けてほしい	③続けてほしくない	4)	
3.保育士がたがねると得られた反応・反響について				3.回答欄
1) ①大変楽しく見ていた	②楽しくみていた	③楽しくみていなかった	1)	
2) ①よく伝わった	②伝わった	③伝わらなかった	2)	
3) ①大変わかりやすい	②わかりやすい	③わかりにくい	3)	
4) ①是非続けてほしい	②続けてほしい	③続けてほしくない	4)	

感想を以下に自由に記述してください

--

施設名	集計
配布日	平成25年8月
回収日	平成25年8月

平成25年度
保育ドキュメンテーション 保護者向けアンケート結果について

配布数A	605	回答数B	447	回収率C (B÷A)	74%
------	-----	------	-----	------------	-----

今回の保育園からの「おたより」についてお伺いします。

※以下回収率Cを100とする

1. 今までの「おたより」との違いがあったと思われませんか?以下のうちから最もあてはまるものを選んで記入してください。

	内容	回答数	割合
①	大きく違った	208	47%
②	違った	146	33%
③	あまり変わらなかった	33	7%
④	変わなかった	41	9%
⑤	わからない	19	4%
	合計	447	100%

2. このように園児の活動をお知らせすることについての感想をお聞かせください。以下の項目それぞれについて最もあてはまるものを選んで記入してください。

1)		内容	回答数	割合
①	とても良い		333	74%
②	良い		101	23%
③	ふつう		12	3%
④	良くない		1	0%
⑤	まったく良くない			0%
	合計		447	100%

2)		内容	回答数	割合
①	大変わかりやすい		263	59%
②	わかりやすい		155	35%
③	ふつう		26	6%
④	わかりにくい		3	1%
⑤	大変わかりにくい			0%
	合計		447	100%

3)		内容	回答数	割合
①	よく伝わる		272	61%
②	伝わる		147	33%
③	ふつう		27	6%
④	伝わらない		1	0%
⑤	まったく伝わらない			0%
	合計		447	100%

4)		内容	回答数	割合
①	毎日見たい		51	11%
②	毎週見たい		127	28%
③	毎月見たい		225	50%
④	2,3か月に一度見たい		41	9%
⑤	別に見たくない		3	1%
	合計		447	100%

平成25年度

保育ドキュメンテーション 保育士向けアンケート結果について

施設名	集計
記載日	平成25年 8月 日

配布した保育ドキュメンテーションに対する保護者の反応・反響について記入してください。

項目ごとにもっとも当てはまるものを選んで○をつけてください

※以下回収率Cを100とする

1.口頭でえられた反応・反響について

回答数 131

1)	内容	回答数	割合
①	大変楽しく見ていた	86	66%
②	楽しく見ていた	45	34%
③	楽しく見ていなかった		0%
	合計	131	100%

2)	内容	回答数	割合
①	よく伝わった	71	54%
②	伝わった	60	46%
③	伝わらなかった		0%
	合計	131	100%

3)	内容	回答数	割合
①	大変わかりやすい	72	55%
②	わかりやすい	59	45%
③	わかりにくい		0%
	合計	131	100%

4)	内容	回答数	割合
①	是非続けてほしい	77	59%
②	続けてほしい	54	41%
③	是非続けてほしくない		0%
	合計	131	100%

2.連絡帳等で得られた反応・反響について

回答数 78

1)	内容	回答数	割合
①	大変楽しく見ていた	39	50%
②	楽しく見ていた	39	50%
③	楽しく見ていなかった		0%
	合計	78	100%

2)	内容	回答数	割合
①	よく伝わった	50	64%
②	伝わった	28	36%
③	伝わらなかった		0%
	合計	78	100%

3)	内容	回答数	割合
①	大変わかりやすい	43	55%
②	わかりやすい	34	44%
③	わかりにくい		0%
	合計	77	99%

4)	内容	回答数	割合
①	是非続けてほしい	41	53%
②	続けてほしい	26	33%
③	続けてほしくない		0%
	合計	67	86%

回答なし 1

回答なし 11

3.保育士がたずねると得られた反応・反響について

回答数 170

1)	内容	回答数	割合
①	大変楽しく見ていた	93	55%
②	楽しく見ていた	77	45%
③	楽しく見ていなかった		0%
	合計	170	100%

2)	内容	回答数	割合
①	よく伝わった	82	48%
②	伝わった	88	52%
③	伝わらなかった		0%
	合計	170	100%

3)	内容	回答数	割合
①	大変わかりやすい	71	42%
②	わかりやすい	99	58%
③	わかりにくい		0%
	合計	170	100%

4)	内容	回答数	割合
①	是非続けてほしい	91	54%
②	続けてほしい	79	46%
③	続けてほしくない		0%
	合計	170	100%